

文化の伝承を手がかりとする衣生活学習への試み

——ゆかたの着装を題材とした教育プログラムの検討——

川 端 博 子	埼玉大学教育学部家政教育講座
小 林 由 実	埼玉大学教育学部平成23年度卒業生（現在 八王子市立七国中学校）
加 藤 順 子	埼玉大学教育学部附属中学校（現在 さいたま市立土合中学校）
薩 本 弥 生	横浜国立大学教育人間科学部
斉 藤 秀 子	山梨県立大学人間福祉学部
呑 山 委 佐 子	大妻女子大学

キーワード：ゆかたの着装、文化の伝承、衣生活学習、家庭科

1. 緒言

情報通信の発達によるグローバル化、利便な生活、核家族化の浸透という社会環境の変化の中で、日本の伝統として培われてきた生活技術に触れ合う機会が減り、古きよきものや自国の伝統文化への関心が低下している。このような背景のもと、平成18年に教育基本法の改正において、「伝統を継承し、新しい文化の創造をめざす教育を推進する」が明記された。中学校技術・家庭科の家庭分野においても、「和服の基本的な着装を扱うこともできる」と記載された学習指導要領¹⁾に基づく授業が平成24年度よりスタートしている。しかし、和服を扱う授業において、指導者側の準備（例えば和服の知識、着付け技能の習得、和服や帯の準備）や指導法（説明・着装・評価まで授業をどう運営するか）などの課題も多く、また、家庭科の少ない時間の中で和服の着装に時間を割くのが難しいのが現状にある。

著者らは、プリント資料、着装DVD、ゆかた・帯などの学習教材一式を準備し²⁾、ゆかたの着装をベースとしながら「きもの」文化に対する理解を深める中学・高校で体験学習の実践を展開してきた³⁾⁻⁷⁾。その中で、男女を問わず生徒たちが着装を楽しみ、きもの良さに気づいていることを、授業を担当した教師とともに実感してきた。また、総合的な学習⁸⁾や国際交流⁹⁾においてゆかたの着装を体験する授業やワークショップに着手し、きもの文化に触れるさまざまな機会から、着装を導入した教育の効果を検証してきた。

和服は、現代の日本においては日常的に着られるものではないため、学習したことを日常生活に生かすことが難しいという課題がある。学習指導要領に和服の着装が盛り込まれたものの、衣服の選択・手入れと和服の着装の関連性は示されておらず、和服の着装学習を、家庭科教育の中にどのように位置づけるかが問われている現状にある。これまでのゆかたの着装を体験する授業実践、研究例を見ると、著者らの平成22年度女子高での試み⁴⁾は、着付け技能の伝承とペアを組んで友だちと着てみる楽しさを味わう側面から文化伝承への貢献の可能性について述べている。また、少人数教育によるゆかた着装の授業実践においては⁷⁾は服装への意識とゆかたに関する意識の関連性があることから、着方学習や衣服関心度を高める可能性について述べている。また、藤井ら¹⁰⁾はゆかたを着装した生徒たちの感想分析に基づいて衣生活を豊かにする工夫育成能力の向

上に有効であるとし、今後、ゆかた着装題材の位置づけが課題であるとしている。これらの事例は、いずれもゆかたの着装を体験する学習が、文化の伝承を手がかりとする衣生活学習に位置づけられることを示唆している。すなわち、ゆかたの着装を題材として、色柄と帯の組み合わせ（コーディネート）が服装イメージへの効果を考える上で有効ではないか、また、個性を生かす着方や着方の工夫にも結びつけ、自らの衣服を主体的・総合的に選択できる姿勢を養う学習として位置づけられるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、次のような授業内容の実践を行った。まず、ゆかたの着装を通じて、きものの良さを知るとともに正しい着付けについて知ることは、文化伝承の上で必要と考え、22年度の実践⁴⁾に引き続き着装後の技能評価を組み込んで、着付けの出来ばえについて理解を促す工夫を試みた。また、用意できるゆかたや教師の負担軽減に配慮しグループ学習の方法をとった。さらに、好みのゆかたと帯を選びコーディネートさせて着る楽しさを高め、被服の印象効果について考えさせる試みを取り入れた。

授業前後での生徒の興味関心の変化、モデルとなった生徒の気持ち、着付けの技能評価、毎時間の体験後の記述をもとに、着付けの理解と正しい評価技能の習得、きもの文化への興味関心の向上とともに自分の衣生活と関連させて視野を広げるねらいが達成されたかについて分析、検討した。

2. 研究方法

2-1 授業実践の対象

授業実践の対象は、埼玉大学附属中学校の2学年4クラス男子88名、女子83名である。2011年5～6月にかけて50分授業4週分を計画し、被服室で授業を実施した。技術・家庭科において「和服の基本的な着装と衣文化」の単元において、同校家庭科担当教諭が担当した。

2-2 学習教材

学習教材は、授業内容と関連して次のように準備した。男物では、ゆかた、角帯、腰ひもである。女物では、ゆかた、半幅帯、腰ひも2本、マジックテープ付伊達締め、作り帯である。ゆかたは中学生の身長を考慮したサイズを揃え、コーディネート学習のために各クラスの生徒数より多目に準備した。

配布資料は、たたみ方と着装に関するプリントとワークシートおよび着装時の写真である。ゆかたの正しい着方・正しくない着方とコーディネート例示および和服全般を紹介するためのスライド資料を用意した（表1参照）。

2-3 授業の構成と内容

授業の内容を表1に示した。1時間目には、まず、事前調査を実施し、その後きものと着付けに必要な基礎的事項を説明した後、資料を見ながらたたんでみることでゆかたに触れさせた。

2時間目は帯結び体験をさせ、これをゆかた着装をスムーズに行うための事前練習として位置づけた。男子では貝の口結び、女子では文庫結びを課題とした。一通り結び終えた生徒たちには繰り返しをさせた。

3時間目の着付けの授業では、スペースと時間の制約から、ゆかたを着る生徒をクラスの1/3程

度に絞り、グループ学習とした。グループの構成は、男女別に2～3人とし、その中でモデルを一人決め、グループで協力して着付けを行った。着付けをしたモデルには、前面と背面からの写真撮影後、着装アンケートに記載させた。

4時間目には、クラス毎に、写真の中から異なる雰囲気ゆかたのコーディネートを男女4組ずつ選んでスライドで示し、最もよいと思うものを選ばせた。ゆかたの色柄と帯の用い方でさまざまな印象になることを学習させるねらいとして、その理由を考えさせた。前時の着付けの写真をもとに着付けのレベルを自己評価させた後、着付けの理解度を問う質問紙調査を行った。授業のまとめとして、和服全般に関する知識と雑誌の切り抜きからゆかたのコーディネートと帯結びの例、きもの全般についてスライドで紹介した。

2-4 授業構成と留意点

本授業実践は、正しい着付けの理解と評価技能の習得、きもの文化への興味関心の向上とともに自分の衣生活と関連させて視野を広げることをねらいとして組み立てられた。

授業を行う上での問題点は、50分区切りで時間的に余裕がない、着付けが男女で異なり難易度に差がある、授業の題材への関心に男女差があるのではないかということである。本授業は、これらのことに配慮しつつ、知識の習得のみに終始せず、生徒がゆかたの良さを味わい、理解を深めるために毎回体験的な活動を取り入れる構成とした。また、たたみ方、帯結び、着付けと区切りをつけながら段階的かつ繰り返しを交えて理解と技能の定着を図った。全員が着装するには、時間が十分でないこと、また教室のスペースの不足に配慮してグループ学習とし、モデルの生徒も参加できるように帯は前面で結ばせる方法で学習を進めた。着付けにおいては、ゆかたが生徒の身長に合うようサイズに配慮し、ゆかたの色柄と帯を選びコーディネートさせて、興味を引くようにした。男子では貝の口を繰り返させたが、女子では、マジックテープ式伊達締めと作り帯で代用して時間短縮を図った。さらに、生徒の理解を促すため、分かりやすく示すことを心がけた。教師による着付けの示範では、プロジェクターで投映し、後方に着席する生徒たちにも細部まで見やすいようにした。著者らが作成した冊子¹¹⁾を中学生向けにポイントを絞ったプリントを作成して配布した。

22年度の女子高の授業⁴⁾において、生徒たちは必ずしも正確に着付けの出来ばえを評価していなかった。授業内での技能習得には至らなくても着付けの出来ばえを正しく評価できることが必要と考えた。このため、出来ばえを生徒たちに客観的評価にさせるためには判断基準の提示が必要と考え、3時間目着付けに取り組む前に、正しい着方・そうでない着方の例をスライドで示し、翌週、写真をみて自分たちの着付け技能を客観化して評価させた。ゆかたの色柄の特徴を活かし、被服による印象の違いを体験させて印象効果に関する学習に結びつけること試みた。以上の授業を通して、着付け技能を理解して衣文化への興味・関心を高める、着姿を振り返らせて着方について考えが及ぶ、着る楽しさとコーディネートの服装イメージへの効果に気づかせて、衣生活への視野を広めるねらいにつなげることを意図した。

毎時間の終わりには、ワークシート(W1【たたむ】、W2【帯結び】、W3【着付け】、W4【これまでの体験全体】)に記入させて、生徒たちが体験して分かったこと・感じたことを文章で表現させた。授業の終わりには発表時間を設け、他者の意見を聞いて理解を深め合えるようにした。

2-5 分析内容

生徒の実態と学習効果の分析は、授業の中で実施した調査や自己評価、ワークシート記述、授業後の事後調査をもとに行った。

(1) 事前調査

事前調査は生徒の実態アンケートであり、授業の方向性と授業効果を把握するための参考として実施した。内容は、①和服（きもの・ゆかた）の着用経験の有無、その機会ときものの種類、②当時の和服着用時の気持ち7項目（気持ちが高まった、優雅な気分だった、うれしかった、帯がきつかった、歩きにくかった、姿勢がよくなった、身のこなしが変化した）、③ゆかたへの興味関心7項目（着付け、ゆかたの色・柄、ゆかたと帯の組み合わせ、帯結びのアレンジ、ゆかたの流行、歴史、TPO（マナー・ルール））④和服のイメージ・知識として、「和服には××のイメージがある」、「和服について知っていることを書いてください」を記入させた。

②・③の回答は、そう思わない（1点）あまりそう思わない（2点）どちらでもない（3点）ややそう思う（4点）そう思う（5点）の5段階尺度から1つを選択する方式とした。

(2) モデルの着装アンケート

モデル（男子：29人、女子：32人）には、写真撮影後、ゆかたを着た時の気持ちとして事前調査②と同様7項目について尋ねた。回答は、事前調査②・③と同様の5段階尺度とした。

(3) 写真による着付けの出来ばえの自己評価と理解度

4時間目に、自分たちの着付けがきちんとできているか写真をみて自己評価させた。男子の評価は6項目（背中心がまっすぐになっている【背中心】、すそが広がっていない【すその広がり】、胸元（えり）がはだけていない【えりの合わせ】、帯（貝の口）の形が整っている【帯の形】、帯が腰下で結べている【帯の位置】、外出できる出来ばえになっている）である。女子では7項目（背中心がまっすぐでたるんでいない【背中心】、すそ（足元）が広がっていない【すその広がり】、胸元（えり）の合わせ方がちょうどよい【えりの合わせ】、すその丈がちょうどよい【すそ丈】、おはしよりが整っている【おはしより】、衣紋（首の後ろ）に適度なゆとりがある【衣紋】、外出できる出来ばえになっている）である。教師評価は、著者らの一人が生徒と同じ条件で着付けの出来ばえを評価した。

着付けの理解度については、5項目（腰ひもの結び方が理解できた【腰ひも】、帯結び（貝の口／文庫結び）【帯結び】が理解できた、たたみ方が理解できた【たたみ方】、一人でゆかたを着ることができる【一人でできる】、人にゆかたを着せることができる【人に着せることができる】）である。回答は、事前調査②・③と同様の5段階尺度からの選択とした。

以降これらの項目は、【 】内の文言で表記する。

(4) コーディネート学習

クラスの中から男女それぞれ4枚の写真を選び出し、スライドで示して、「どれが最も好きか」「その理由を3つまで選んでください」としてプリントに記載させた。理由としては「かっこいい、大人っぽい、夏らしいなど」図4に示す10項目とその他の11項目から選ばせた。

(5) ワークシートの記述

授業の終わりにこれまで体験して感じたことの記述（W1～W4）をさせ、内容別に分類・集計した。

(6) 事後調査

2011年10月に事後調査を実施し、授業を受けて感じたこと4項目（難しかった、楽しかった、

和服について関心をもてた、ゆかたを着てみたい)を上記と同様の5段階尺度からの選択とした。授業の後にしたこと(ゆかたを着た、家族と和服の話をした)をはい・いいえで選択させた。

表1 授業の内容

時間	学習内容と教師の働きかけ	生徒の活動	調査用紙1)～5)とワークシートW1～W4
1	和服の基礎的知識 (歴史・構成) ゆかたの基礎知識 (歴史・部位名称) たたみ方(プリント)	生徒の実態調査 ゆかたをたたむ	1) 事前調査 ①和服の着用経験 ②和服着用時の気持ち ③ゆかたへの興味関心 ④和服のイメージ・知識 W1 たたんでみて感じたこと
2	ゆかたの帯の役割 帯の結び方(投映、プリント)	帯結び体験	W2 帯結びをして感じたこと
3	着付けの仕方について (投映、プリント) スライドによる正しい着方とそ うでない着方	帯とゆかたのコーディネート 着付けの体験 モデル着姿の写真撮影 ゆかたをたたむ	2) モデルの着装アンケート W3 着付けをして感じたこと
4	学習の振り返り スライドによるコーディネート 例 現代に残る和服	写真による着付けの自己評価 好きなコーディネートとその理 由 たたみ方の復習	3) 着付け技能の自己評価と理 解度 4) 好きなコーディネート投票 W4 これまでの体験を通して 感じたこと
秋 季			5) 事後調査

3. 結果および考察

3-1 授業前の生徒の実態

(1) 和服(きもの・ゆかた)の着用経験

和服の着用経験は男子(あり64名、なし22名、回答なし2名)女子(あり82名、なし1名)であった。ありと答えた生徒の、一番最近着た機会ときものの種類では、夏祭りのゆかた(男子26名、女子55名)、七五三の羽織・袴(17名)やきもの(9名)、旅館のゆかた(男子9名、女子7名)の順であることから、ゆかたはもっともなじみのある和服とみなされる。

(2) 着用した時の気持ち

図1には、授業前後の着用した時の気持ちについて、モデルの生徒のみ取り出し回答の平均値を男女別に示した。着付けに参加した生徒とモデルの生徒別に、授業前の回答を分析したところ、男子の場合、回答に有意差はなかった。女子では、「歩きにくかった」のみで(着付け:4.11点,モデル:3.25点 $p<0.01$)となりt検定で有意差がみられた。このように、着付けに参加した生徒とモデル生徒間の比較では、男女ともモデルの生徒の方が気持ちの高まりを感じ、否定的な内容には低く回答する傾向がみられ、和服の着用に対して肯定的な意識の生徒がモデル役をしたと推察される。

授業前の男子は「気持ちが高まった」「優雅な気分だった」「うれしかった」の平均は低くとどまり、和服の着用時に気持ちの高揚はなく、「歩きにくかった」「帯がぎつかった」の否定的な項目の平

均の方が高かった。女子では、気持ちの高揚に関わる項目では男子より肯定的であるものの、「帯がきつかった」「歩きにくかった」の否定的な質問に対しては男子より高い傾向であった。「気持ちが高まった」「優雅な気分だった」「うれしかった」(p<0.01)において、t検定で男女間に有意差がみられた。

(3) ゆかたへの興味関心

和服にはいろいろな種類があるが、本授業ではゆかたを扱うことを知らせた上での、ゆかたの興味関心についての回答の平均値を男女別に、図2に示した。授業前についてみると、男子の事前では7項目すべてで平均が3点を下回り、興味関心は低かった。女子は、歴史を除く6項目で男子の平均を有意に上回り、興味関心が高かった。特に、「色・柄」「ゆかたと帯の組合せ」が4点を超える高い値となった。男子で最も点数が低かった「流行」について、女子は男子より1.4点高く4位となり、ファッション性にも関心を寄せている。しかし、生徒全般の興味関心は高いとはいえない実態であった。

(4) 和服のイメージと知識

図3は和服のイメージと知識に関する記述内容を分類し、男女別に整理したものである。イメージの記載総数は、男子205件、女子223件であった。「伝統文化・歴史に関するもの(日本的、日本の象徴、昔のものなど)」193件が最も多く、「場面(祭り、行事、温泉・旅館)」127件、「印象(きれい、上品、正式)」66件が続いた。

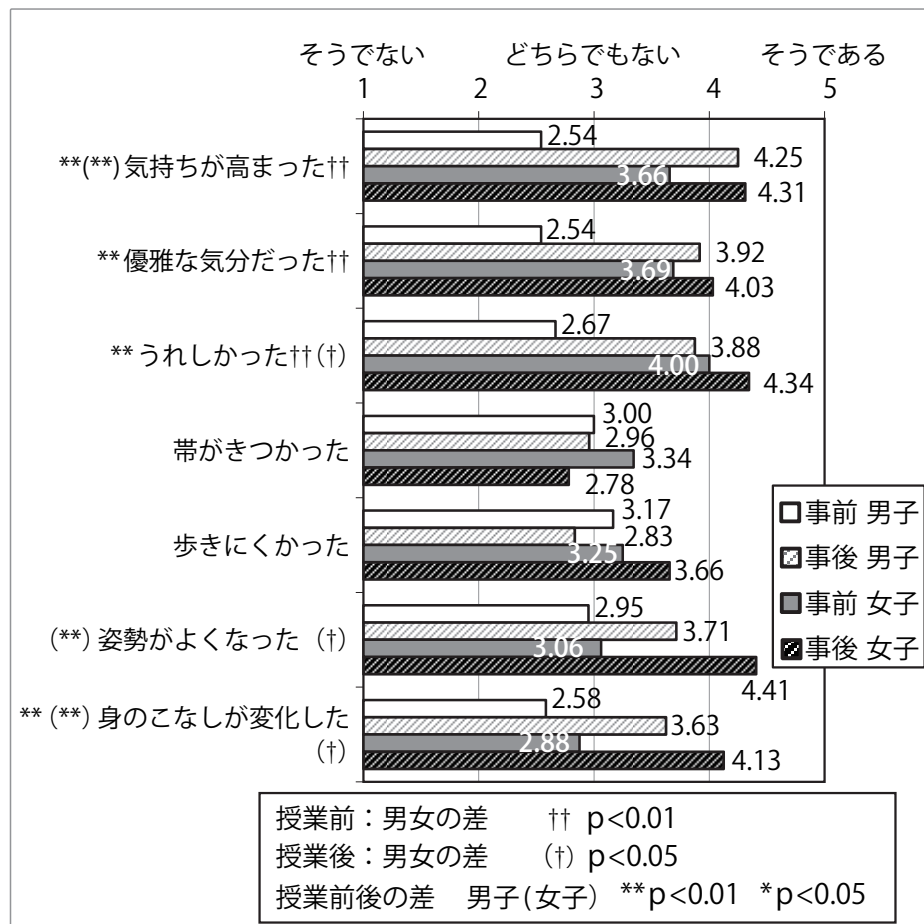


図1 和服着装時の気持ち (授業前と授業後)

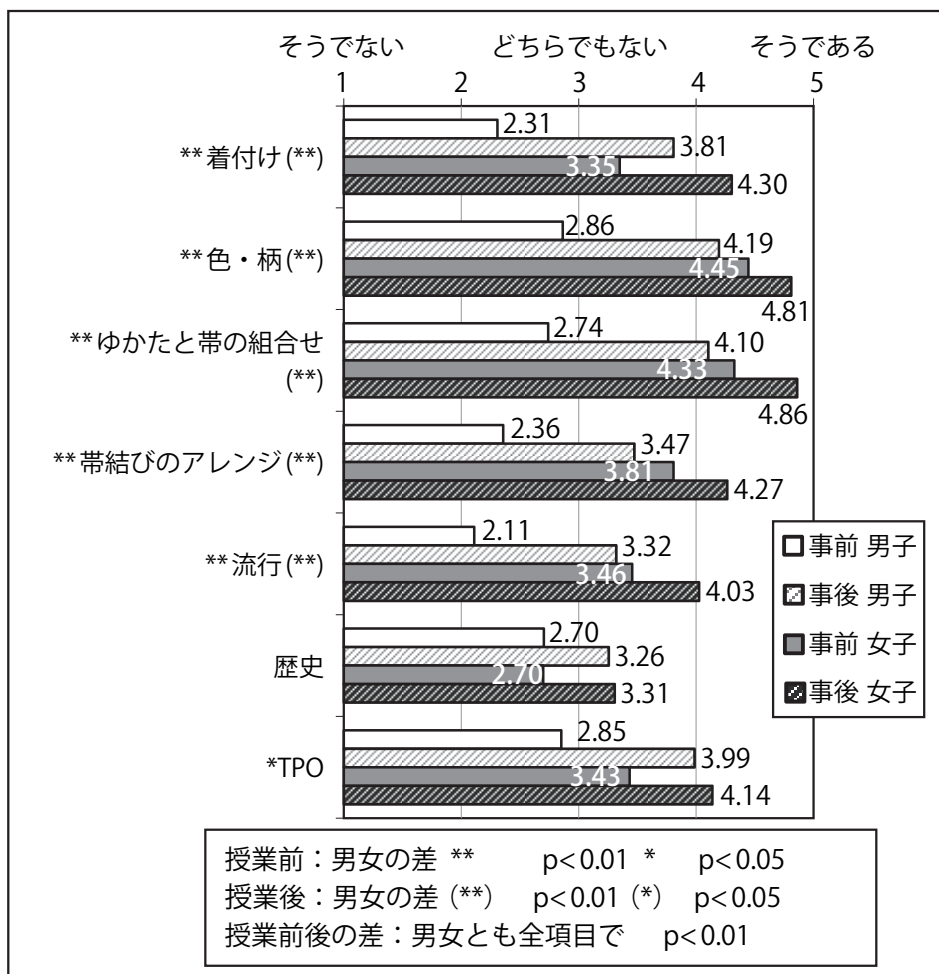


図2 ゆかたへの興味関心（授業前と授業後）

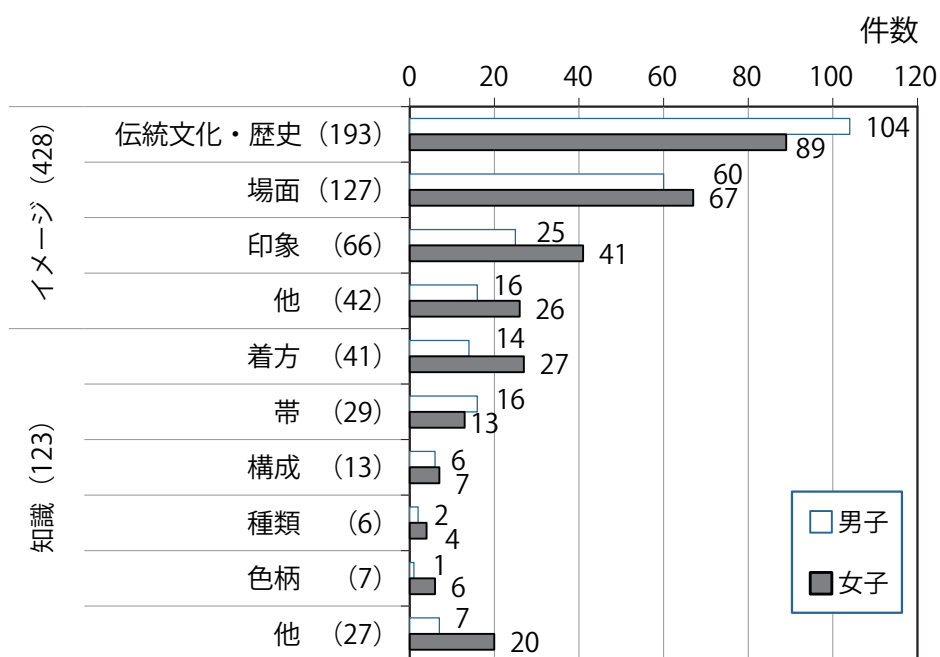


図3 和服のイメージと知識（事前調査）

知識の記載数は男子46件、女子が77件であった。最も多かったのは「着方（着る順番が決まっている、着方に決まりがあるなど）」41件で、「帯（帯がある、帯を締めるなど）」「構成（丈が長い、上下が分かれていないなど）」「種類（いろいろな種類があるなど）」「色柄（色が豊か）」の順となった。その他には、履物、流行、十二単などが単語で記載されていた。着方に関しては、えりの合わせに関する記述が散見されたが、帯の巻く方向で生死を現わす、男女でえりの合わせが違うなど間違った内容の記述もみられた。何も記載しない者が全体の1/3を超え、全体として、生徒の知識は少なく、断片的かつあいまいで、生徒の和服への興味関心は高くないと推察された。

3-2 授業の効果

(1) ゆかた着装時の気持ち

図1に示すモデルとなりゆかたを着装した生徒の授業後の回答についてみると、「気持ちが高まった」など、ゆかたのよさに関する5項目全てで着用前より平均値が高まった。男女差は、「うれしかった」「姿勢がよくなった」「身のこなしが変化した」では女子の平均が高く有意差 ($p < 0.05$) がみられ、授業後も女子の方が肯定的であるものの、男女の差は縮まっている。一方、「帯がきつかった」などの否定的な項目では大きな変化はなく、平均は低くなる項目もあった。このことより、モデルの生徒には着る楽しさを感じさせるねらいが達成でき、ゆかたと帯のコーディネート、写真撮影、モデルとなって他者から見られたことによる効果があったと推察される。

(2) コーディネート学習

図4は、男物・女物ごとに、ゆかたと帯の組み合わせの好きな理由を男女別に集計したものである。

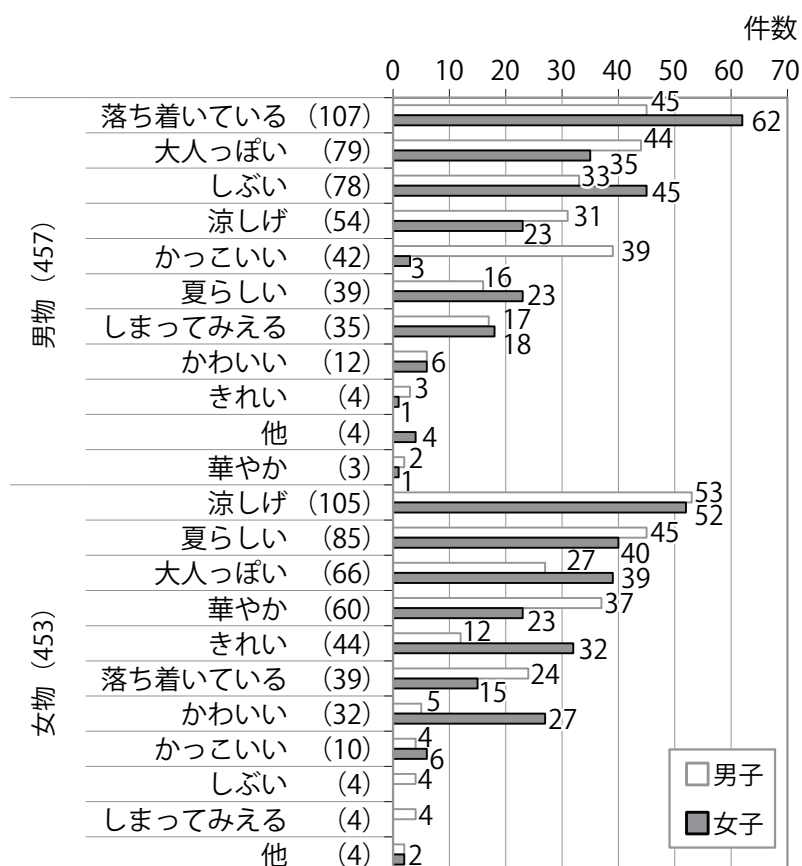


図4 好きなゆかたと帯の組み合わせの理由

男物については、まず落ち着いている等の全体的印象、次いで涼しげ等の季節らしさが挙げられたが、女物に関しては涼しげ等の季節らしさが最も多く、ついで、大人っぽいなどの全体的印象が挙げられるという結果となった。これは、男物ゆかたは寒色系・モノトーン系で比較的細かい柄が多く、女物は季節を表現する柄物が多い傾向にあるためと考えられる。

本授業では、男女4組のコーディネートをスライドで示して、生徒には好きな組み合わせを選択させてその理由を選ばせる方法で行った。好みの理由を考えることは、服装の印象に気づく、また、男物・女物の色柄のもつ印象の違いに気づく学習になったと考えられる。これは、コーディネートに関連させてその全体的印象について気づくことであり、服装イメージ効果の学習の方法の一つとして位置づけられる。洋服におけるコーディネートは生徒の興味・関心が高いものであるが、個人の服装の価値観が関与するため、授業への取り入れには難しい側面がある。ゆかたを題材とする学習は、形が同じであるため服装イメージをより明確に認識できる題材となり、衣生活の視野を広げる学習の機会になると考える。

(3) 着付けの出来ばえの自己評価と教師評価

表2に、生徒による着付けの出来ばえの自己評価と教師による教師評価の平均値および相関係数を示した。

自己評価の平均は、男子では【帯の位置】、女子では【おはしより】が他に比べて低い傾向であった。男子では帯が上方にずれがちで、女子ではおはしよりを整えるのが難しいためと考えられ、先行研究と同様の結果となった⁴⁾。【すその広がり】で男子の平均が低かったのは、帯幅が狭いためすそが開きがちになったためである。それ以外の個別項目は、4点を超えており概ね良いとみなしている。総合評価としての【外出できる出来ばえ】は有意差がないものの男子で低い傾向であった。

総合評価としての【外出できる出来ばえ】と個別項目の相関では、男女ともほとんどの個別項目と有意な相関 ($p < 0.01$) がみられる。中でも、【すその広がり 男子： $r = 0.44$ 女子： $r = 0.49$ 】と【えりの合わせ 男子： $r = 0.50$ 女子： $r = 0.48$ 】は比較的相関が高く、【すその広がり】と【えりの合わせ】が男女共通に出来ばえを左右する要素とみなされる。男子では、【帯の形 $r = 0.56$ 】との相関が最も高く、貝の口の形が着付けの出来ばえに及ぼす影響は大きいととらえている。

表2 着付けの自己評価と教師評価の平均および相関係数

	平均				相関係数				
	自己評価		教師評価		自己評価 (外出できる出来ばえ×個別項目)		自己評価×教師評価		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
外出できる出来ばえ	3.82	4.01	3.13 **	3.15 **	1	—	1	0.27	-0.03
背 中 心	4.13	4.37	3.32 **	2.54 **	0.31 **	0.35 **	0.10	0.03	
す の の 広 が り	3.99 **	4.45	2.57 **	3.18 **	0.44 **	0.49 **	0.41 **	0.37 **	
え り の 合 わ せ	4.34	4.58	3.80 **	2.79 **	0.50 **	0.48 **	0.54 **	0.21	
帯 の 形	4.02	—	3.04 **	—	0.56 **	—	0.40 **	—	
帯 の 位 置	3.20	—	3.19	—	0.33 **	—	0.68 **	—	
す そ 丈	—	4.41	—	3.24 **	—	0.39 **	—	0.45 **	
お は し よ り	—	3.63	—	2.49 **	—	0.41 **	—	0.07	
衣 紋	—	4.43	—	2.49 **	—	0.12	—	0.37 **	
差の検定	男女間		生徒と教師間		** $p < 0.01$ で有意な相関				
	t 検定	** $p < 0.01$	t 検定	** $p < 0.01$					

同項目についての教師評価と生徒評価との比較では、生徒評価のほうが高い得点となる傾向で、【帯の位置】を除き生徒と教師間に有意差がみられた。男子の評価の順位は概ね教師に一致したが、女子はおはしりが最低点であることのみ一致した。教師評価において、男子では【すその広がり】、女子では【おはしり】【衣紋】【背中心】が低く、これらの点がうまくできない箇所とみなされる。

自己評価と教師評価の相関を求めたところ、男子の【帯の位置0.68】はもっとも相関が高く、【えりの合わせ】【すその広がり】【帯の形】でも有意の相関が示され、生徒と教師の評価が一致する傾向にあった。女子は、【すそ丈】【すその広がり】【衣紋】の3項目で有意な相関がみられた。女子の評価について、女子高での先行研究⁴⁾と比べて生徒、教師間の相関係数は高くなり、中学生でありながら、高校生より正確に出来ばえを評価したといえる。これらは、スライド資料により良い着方・だらしないう着方の例により判断基準を提示した効果であると考えられる。

(4) 着付けの理解度

図5には着付けの理解度を男女別に示した。腰ひも、帯結び、たたみ方は全体の8～9割が「そう思う、ややそう思う」と回答し、理解度の意識に男女差はなかった。「人にゆかたを着せることができる」は7割であるが、「一人でできる」は半数に至らず、1回の体験では習得したと思っていないものの、多くの生徒が腰ひもや帯結び、たたみ方が理解できるレベルになったと自己評価している。着付ける生徒とモデル両者の理解度を比較したところ、差がなかったことから、グループ学習により、着付ける生徒とモデル生徒両者で理解度を同レベルに維持できたと考えられる。

(5) 授業後のゆかたへの興味関心

授業後のゆかたへの興味関心の平均値を授業前と比較した結果を図2に示した。男女とも大きく向上し、すべての項目において $p < 0.01$ レベルで有意差がみられた。女子で興味関心が高い傾向に変化はないものの、授業後には男子も大きく向上したため男女差は縮まった。女子の「色・柄」と「ゆかたと帯の組み合わせ」では、全体の98%が「興味がある」と回答し、非常に意識が高く

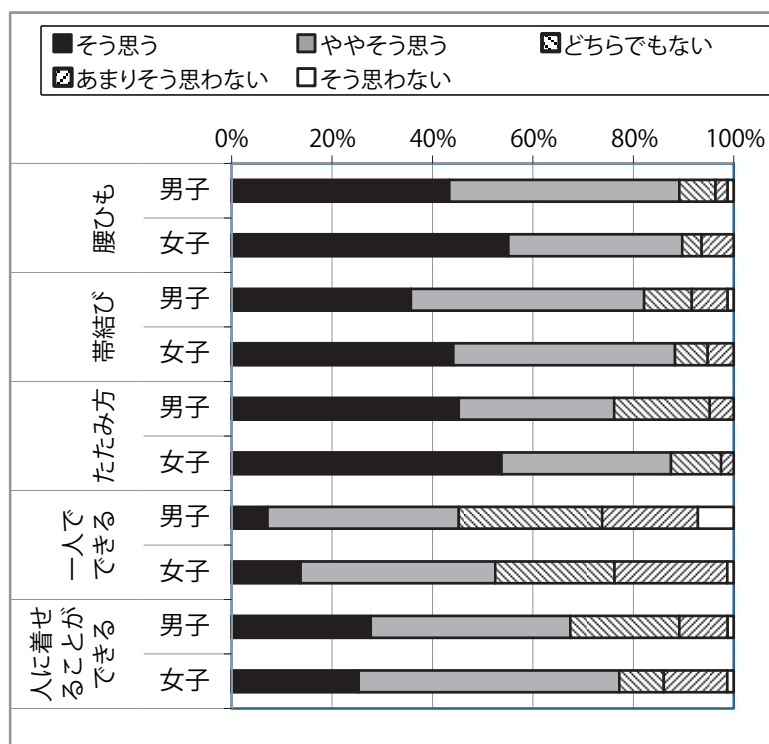


図5 着付けの理解度

なった。ここでは、授業時にゆかたと帯を自由に選ばせるという指導の効果もあったと考える。

(6) 振り返り調査

4か月後の振り返りでは、「難しかった」「楽しかった」「和服に関心をもてた」の項目で、全体の7～8割の生徒が「そう思う、ややそう思う」と回答し、多数を占めた。「ゆかたを着てみたい(58%)」「ゆかたを着た(13%)」では、肯定度は低く、生活での実践には至っていない。しかし、「家族と和服の話をした(52%)」となり、本授業は和服に関心をもつきっかけづくりの役割を果たしたといえる。授業を楽しいと感じた生徒は、和服に関心をもち、着てみたい・着たいに結びつく傾向がみられたことから、着付けについて技能を習得するに至らないまでも生徒同士の楽しい学習体験がきもの文化の継承に関わる機会きっかけづくりになったと考える。

3-3 ワークシートの記述内容

各時間に記載されたワークシートの記述内容を整理した。洋服との違い・構成、出来ばえと難易度、感想を共通観点として分類し、その他に記載される内容とあわせて件数を図6にまとめた。

(1) 洋服との違い・構成

1時間目のたたむにおいては、ゆかたの構成に関する記載は最も多く総数で159件挙げられた。「和洋の違い(洋服と違って端を揃えてたたむことができる)」60件、「大きさ(大きなゆかたがたたむと小さくなる)」31件、「直線性(すべてが直線でできている)」28件の順に多く記載されている

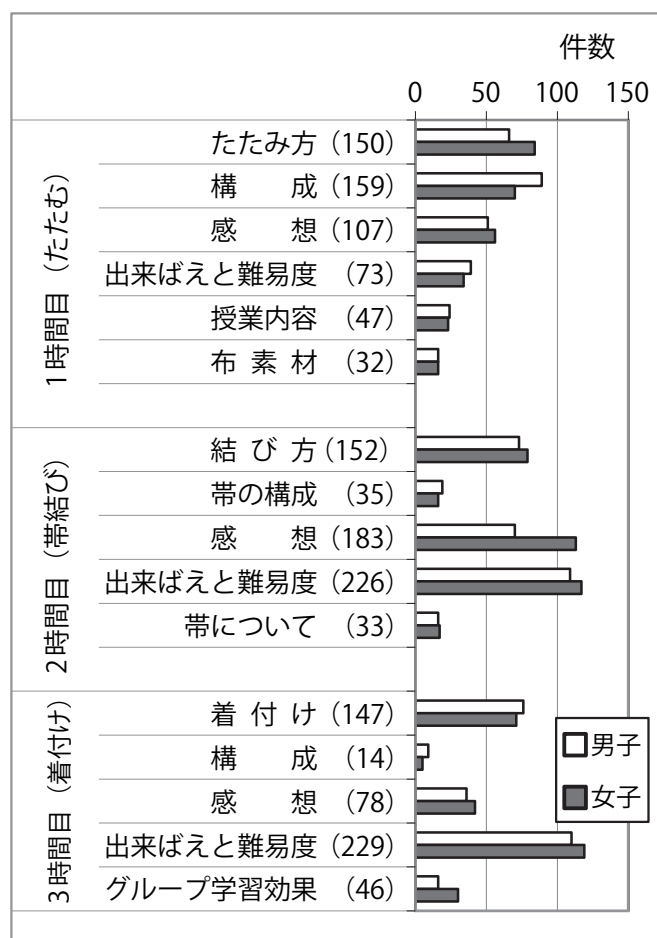


図6 ワークシート記載内容と記載件数

る。2、3時間目の帯結びと着付けにおいては、構成に関する記述は少ないが、洋服との違い（和服は帯まで気をつけなければならず大変だから洋服が広まったのだと思う、洋服とは異なる）、男女の違い（男性用と女性用で異なる）などである。初回のたたみ方で構成の違いを理解し、着付けでは共学校での学習が洋服の違いと男女の違いを知る機械となっていることが推察された。

(2) 出来ばえと難易度

出来ばえと難易度について、うまくできた・できないと簡単・難しいの観点から分析した。1時間目、たたむにおいては73件のうち約半数は「うまくできた・簡単だ」37件、残り半数は、「しわがよる、折り目がずれる、やり方を覚えるのが難しい」36件と感じていた。その後の時間でたたみ方を繰り返しており、定着が図れたのではないかと考えられる。2時間目、帯結びは生徒の4割が「難しい・大変」という記述をしており、「帯の形・バランス」「長さの調節」「巻くきつさ」が困難な点として多く挙げられた。3時間目、着付けにおいても、4割近くが「難しい・大変」61件記述していた。具体的には、「着付け全般」23件に続き、男子は「帯、しわ、すそ」18件、女子では着付けに際して女子は作り帯としたため、帯の記述が少数であったが「おはしより」13件であり、これらの点が印象に残ったと考えられる。これらは、生徒のつまづきやすい点として、重点的に説明する、あるいは繰り返し指導する等の工夫が必要である。3時間目の着付けでは出来ばえと難易度の記載数は226件と最も多く、「うまくできた、手早くできた、簡単だ」は31件にすぎず、1回の練習でできたとはとらえていないと伺えた。

(3) 感想について

1時間目、たたみ方体験の感想として、ゆかたそのものとたたみ方に「意外性（意外と難しい・簡単、思ったより単純な構造）」32件、「向上心（手順をしっかり覚えた、家のきものでもやってみたい）」31件、「驚き（コンパクトになって驚いた）」14件、喜び「きれいにたためて良い体験になった」14件などが続いた。2時間目、帯結びでは、「意外性（意外と簡単でできそう、意外と難しかった）」23件、「向上心（もう少し自分でできるようになりたい）」43件、「満足感（よかった、うれしかった）」22件が続いた。特に女子の場合、帯の色が楽しく好イメージで受けとめられたようである。3時間目の着付けでは、「向上心（次は授業を思い出してきれいに着付けたい）」20件、「満足感（よかった）」13件、「意外性（男物は簡単）」9件などがみられた。2時間目の帯結びの感想が他の時間より多く見られたのは全員が体験した効果と考えられ、3時間目の着付けへの動機付けになったと推察される。

(4) 学習の振り返りの記述内容について

4時間目、学習の振り返りの記述を次の4つの視点から分析した。「和服のよさを感じられた」55件、「きもの文化に積極的に関わっていききたい」46件、「授業を生かしたい」28件、「伝統文化を継承したい・大切にしたい」16件である。これらのいずれかを記述した生徒は、全体の7割に達した。衣に関する伝統文化に触れ、そのよさを感じさせる、すなわち着付けを通して、衣文化への興味・関心を高めるといふ本授業のねらいがほぼ達成されたと考えられる。さらに、服装イメージやコーディネートに関する記載37件が見られ、コーディネートの服装イメージへの効果についても、生徒なりに考えるきっかけになったと考えられる。

3-4 授業の構成・方法とその効果

本授業実践は、着付けの理解と正しい評価技能の習得、きもの文化への興味関心の向上とともに自分の衣生活と関連させて視野を広げさせることをねらいとして、組み立てられた。

学習教材に関しては、ゆかたの着装プリント、ワークシート、およびゆかたの正しい着方・正しくない着方のスライドを準備し、男女の難易度を調整するために女子用には「作り帯」を用いた。これらの教材は先行研究²⁾⁷⁾の流れを汲むものでHPの掲載内容を利用しているが、ゆかたについてはレンタルを利用する等の方法⁸⁾も考えられる。

また、モデルの生徒が着装するというグループ学習を採用した。グループ学習の場合、一部生徒の積極的な学習への参加が難しくなる場合があるが、何を学習するか明確に示すこと、また、教師の示範をプロジェクターで投映する、着付けについてのプリント配布など、生徒の理解度向上を図る方法をとったこと、および、帯とゆかたのコーディネート作業、コーディネートの評価作業、自己評価の作業を組み入れることで、生徒の積極的授業参加を促すことができたと考えられる。

授業の構成としては、たたみ方、帯結び、着付けと区切りをつけながら段階的かつ繰り返しを交えて理解と技能の定着を図る方法を取り、それぞれにワークシートを記入することにより内容を生徒に確認させる授業とした。このような方法が生徒の理解を深めるとともに教師による学習効果の把握に寄与することが示された。

着付けの出来ばえについての自己評価は、先行研究の課題をふまえ⁴⁾、正しい着方、そうでない例のスライドを見せ、理解を促した。その結果、生徒の自己評価と教師の評価間の相関が高くなったものの、男子の「すその広がり」、女子の「おはしより」「衣紋」「背中心」の評価が低く、着付け学習の留意点が示された。

衣生活に関連するコーディネート学習に関して、一般的服装のコーディネートがそのイメージにどのように影響するかについての学習には至らないものの、ゆかたという形状を一致させた条件下での服装の印象に気づく、また、男物・女物の色柄の印象の違いに気づく学習となり、コーディネート学習への応用、あるいは衣生活学習としての展開の可能性が示唆された。

以上のことより、正しい着付けの理解と評価技能を習得する授業が展開され、生徒のきもの文化への興味関心の向上と、コーディネート学習により生徒の衣生活の視野を広める可能性が示され、本授業実践のねらいはほぼ達成されたと考えられる。

4. まとめ

和服を扱う授業において、指導者側の準備や指導法などの課題も多く、家庭科の少ない時間の中で和服の着装に時間を割くのが難しいという現状がある。また、学習指導要領において、和服の着装が盛り込まれたものの、和服を取り扱う授業を家庭科の学習にどのように位置づけるかについて問われている。本研究では、著者らの先行研究をふまえて、正しい着付けの理解と評価技能の習得、きもの文化への興味関心の向上とともに自分の衣生活と関連させて視野を広げさせることをねらいとする授業実践を行い、授業の効果、授業の構成や方法、衣生活教育との関連について検討した。

生徒に和服着用時の気持ちについて聞いたところ、「気持ちが高まった」「優雅な気分だった」等の肯定的項目の評点は、男女とも授業前より授業後に高くなり、その変化は男子で顕著であった。ゆかたへの興味・関心について、「色・柄」、「ゆかたと帯の組み合わせ」「着付け」等の項目の評点は、男女とも授業前より授業後に有意に高く、その変化は男子に顕著であった。

正しい着付けについての情報（判断基準）を示し、着付けに対する自己評価を取り入れた授業および教師による評価により、生徒の正しい着付けに対する理解を深める一助となること、また、

指導の際に留意する点が示された。

ゆかたのコーディネートについて考える学習は、生徒の服装イメージへの効果に気づく体験となり、ゆかたを題材とする衣生活教育での服装コーディネート学習への展開の可能性が示唆された。

伝統文化に触れる家庭科の授業として、50分4時間の授業時間で、中学校の男女生徒を対象に、家庭科被服室におけるグループ学習という方法、ゆかたに触れるたたみ方の習得、帯結び、着付け、着付けの自己評価の実施という授業構成、ゆかたを選択しコーディネートについて考える体験の導入という実践が行われ、今後の中学校家庭科における伝統文化を伝える授業の方法が開発された。

著者らは、これまで、総合学習における授業実践⁸⁾、高等学校におけるATを活用した授業実践等⁶⁾、ゆかたの着装を体験する授業の成果について公表してきた。今後、これらの成果を生かしつつ、様々な授業構成と方法を含む教育プログラムの検討を進めたいと考えている。

研究の一部は、2012年日本家庭科教育学会55回大会にて発表した。本研究は文化・ファッション研究機構・服飾共同研究：「きもの文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発」の一環として行われた。

研究の遂行にあたり、同機構の研究メンバーの茨城キリスト教大学扇澤美千子先生と横浜国立大学堀内かおる先生に、感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 中学校学習指導要領解説、技術・家庭編 文部科学省、pp.59-60 (2008)
- 2) 薩本弥生他：きもの文化の伝承と発展のための教育プログラム、<http://kimono-bunka.ynu.ac.jp/>
- 3) 薩本弥生他：ゆかたの着装を含む教育プログラム開発をめざした中学校技術・家庭科での授業実践、日本家庭科教育学会誌 pp.14-22 56 (1) (2003)
- 4) 川端博子他：ゆかたの着装を題材とする授業実践の試み、日本家庭科教育学会誌 pp.78-89 56 (2) (2013)
- 5) 堀内かおる他：「和」の生活文化を体験する家庭科の教育実践、日本家庭科教育学会第54回研究発表要旨集 pp.16-17 (2011)
- 6) 薩本弥生他：きもの文化の伝承をめざした浴衣の着装を含む教育プログラム開発のための中学校技術・家庭科での授業実践－教育学部のATを活用した試みから－、日本家庭科教育学会第55回研究発表要旨集 pp.36-37 (2012)
- 7) 扇澤美千子他：ゆかたの着装を題材とする授業実践の試み少人数制を導入した授業展開 埼玉大学紀要教育学部 pp.1-14 61 (2) (2012)
- 8) 扇澤美千子他：ゆかたの着装体験を組み込んだ総合的な学習の時間の授業分析、埼玉大学紀要教育学部 pp.1-12 62 (1) (2013)
- 9) 薩本弥生：英国での浴衣ワークショップ、日本衣服学会 pp.105-106 54 (2) (2010)
- 10) 藤井志保他：中学校技術・家庭分野における衣生活文化の題材開発、広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要 pp.147-152 40 (2012)
- 11) 斉藤秀子、呑山委佐子編集：ゆかたがわかる、文化ファッション研究機構平成22年度服飾文化共同研究「きもの文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発」研究グループ (2011)
- 12) 薩本弥生他：「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発、文化女子大学文化ファッション研究機構服飾文化共同研究報告 pp.18-23 (2010)

An Approach to the Study of Clothing Life Using Cultural Tradition:

A Proposal for an Educational Program featuring the Wearing of Yukata

KAWABATA, Hiroko

Faculty of Education, Saitama University

KOBAYASHI, Yumi

Faculty of Education, Saitama University

KATO, Jyunko

The Junior High School Affiliated to the Faculty of Education, Saitama University

SATSUMOTO, Yayoi

Faculty of Education and Human Sciences, Yokohama National University

SAITOH, Hideko

Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University

NOMIYAMA, Isako

Otsuma Women's University

Abstract

Home economics classes were conducted in junior high schools implementing the wearing of the Yukata, where students in groups of two or three were asked to coordinate and put on Yukata and Obi of their own preference. Instructions were devised so that boys and girls could be efficiently taught of their respective ways to put on the Yukata, and to convey information on how to put on the Yukata in a correct way. Each student was asked to evaluate on their own performance for the coordination by looking at their photos. It was revealed from the results that students felt they were able to understand how to wear the Yukata, even through group teaching, and that their evaluation for the performance was higher than the results from other previous studies.

The students who modeled for the performance stated that they enjoyed wearing the Yukata and felt a growing excitement. All students were asked to select and state the reason for their favorite choice after they were shown the slides of all the coordination. Sequence of these classes seems to have become a good opportunity for the students to experience enjoyment in wearing and to feel the effect of clothing on constructing images. Their interest towards the Kimono grew significantly after the classes were conducted, and feedback of their impressions include 'merits of Japanese-style clothing', 'would like to be involved more aggressively in the Kimono culture' and 'image and coordination'. From these results, we conclude that our program, as well as providing opportunities to pass on the cultural tradition, can connect to the study of wearing within the study of the clothing life.

Key Words : Wearing Yukata, Cultural tradition, Study of the clothing life, Home economics class